〈私の研究〉 篩分けに関する研究

三輪茂雄

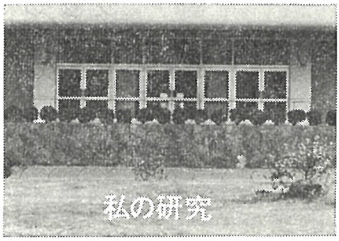
専門というものは，分野のちがう人から見ると，サッパリ見当がつかないもので，好奇心からテーマを聞いてはみるものの，ヘエーとあきれるのが関の山である．私のテーマは“篩(ふるい)分けに関する研究”というのであるが，これはときどき“節(せつ)分に関する研究”と間違えられて感心されたり，民俗学者と間違えられて古道具収集家に紹介されたりしたものである．たしかに，古い農家の庭先には最近まで“篩”が吊してあったものである．

しかし，私が扱っているのは，実は，現代の最尖端をゆく，いや21世紀を拓(ひら)く機械装置としての“篩”なのである．これは粉体工学という最近活躍をはじめた分野で考えないと，なぜ篩を研究するかが説明できないのであるが，この粉体工学がまたいけない．私が同志社へ来たのは三年前であるが，粉体工学研究室という名を電話で通じるようになるのにずいぶん時間がかかったものであった．“粉”というと，ウドン粉くらいしか連想してもらえないのが普通だからである．研究室で卒論に配属されて，卒業間際になって，やっと“粉”の存在の重大さがわかりかけるのだから無理からぬことかも知れない．

手取り早く粉体を理解してもらうには例を挙げるに限るのであるが，いま私が原稿を書いているとき，ちょうどメキシコ・オリンピックの入場式の再放送中である．カラーテレビで感激していらっしゃる方，そのブラウン管やトランジスター部品は粉体プロセスで造られ，その工程で篩分機械で篩分けられたものですぞ．現代はほう大な物量の時代，マスの時代として，従来の観念を変革しつつあるが，そのなかで物質が粉体の形で，しかも大量に扱われるようになったのが一つの大きな特色である，と粉体工学者たちは考える．われわれの身辺は今や石油化学の製品で満たされ，やがて石油を食わされそうな形勢にあるが，あのポリエチレン，ポリスチレン，ビニール，などの製品がそのプロセスで一度必ず粉体の形をとり，そして篩の目を通ることによってコントロールされているのである．ハイウエーを走るマイカーのタイヤもカーボンの粉をゴムで固めたもので，その粉の篩分けは大変な難題である．薬をのむときもすぐ篩が気になり，ライスカレーを食べても，そうだから，薬効も栄養価も，私の場合半減してしまうらしい．訪問着姿の娘さんはすばらしいが，あのプリントにつかう甘諸澱粉の粒度が気になってしまう．

現在工業的には40ミクロンの網がつかわれるが，それは髪の毛の½くらいになる．ところが21世紀を拓くにはその1/10以下まで実現しなければならないという．それが瞳孔に網目のついた私の未来である。

（工学部教授・粉体工学）



信貴山縁起絵巻の研究

笠井昌昭

学部の卒業論文は「白鳳彫刻」であった。そのころやかましかった白鳳論争に一挙に決着をつけてやろうという意気ごみであった。もともと仏像がみたい一心で、富士山麓の田舎町から出てきたのである。学部の二回生ころヴォーリンガーを夢中でよみ、それからドヴォルシャック、ヴェルフリンへとすすんだ。ヴォーリンガーの影響はいまだに払拭しきれない。ともかく、日本の美術史学の未熟さが痛感され、引き続き上代彫刻の様式を確立させるつもりで大学院へ進んだ。ところが修士論文を書かないうちに『奈良美術史入門』なる書物を一冊書いて、何となく彫刻史のことは分ったような気になってしまったのだから、若さというものはいたし方がない。おこがましい限りである。

そしてそのころ、絵巻物の世界がわたしを虜(とりこ)にしはじめた。しかも、絵巻物の奥の院といわれる「信貴山縁起」にいきなりとびついてしまったのだから、これまた盲蛇におじずということか。修士論文はけっきょく「信貴山縁起の研究」ということになった。しかし、わたくしの「信貴山縁起」の研究は修士論文を書いたあとで、本当に始まったといってよい。さすがに絵巻物の奥の院といわれるだけあって、たちまち壁に突き当って二、三年放り出し、その間「北野天神根本縁起」を手がけたり、『日本書紀』の紀年論に手を出したり、はたまた桃山時代のことを考えたりして大いに道草をくい、ようやくこと三年ほど真剣に取り組んで八年ぶりにまとめあげた。「信貴山縁起」は「源氏物語絵巻」と並び称される絵巻だが、作者・製作年次の問題をはじめとして、文字どおりの寺院縁起絵巻か、それとも単なる民間説話絵巻かという、この絵巻の性格についての問題さえ論議の的である。その内容に至っては、こと細かな点に種々の論議がかわされている。

わたくしは、比較的等閑視されていた飛鉢の問題から考察し、鉢が千石もの米を積んだ倉を長者の家から運びさるという物語の主題が、仏教説話にがんらい基くよりは古代の『風土記』にみえる「餅の的」の長者伝説の中世的翻案にほかならぬことを論証し、つづいて、この縁起譚の成立に聖徳太子信仰が密接に絡んでいること、しかもその聖徳太子信仰は一般的なタイシ信仰＝御子神信仰において古代の農耕信仰ともつながりのあることを説き、聖徳太子に関連して四天王寺別当であった鳥羽僧正をもう一度筆者として考えなおすことによって、白河ー鳥羽院政期の文化と「信貴山縁起」との問題に説き及んだのである。

「信貴山縁起」のもつ謎解きの面白さはまだまだわたしからはなれそうにもない。

（文学部助教授・日本史学史）